退職園長による子育て塾(3)

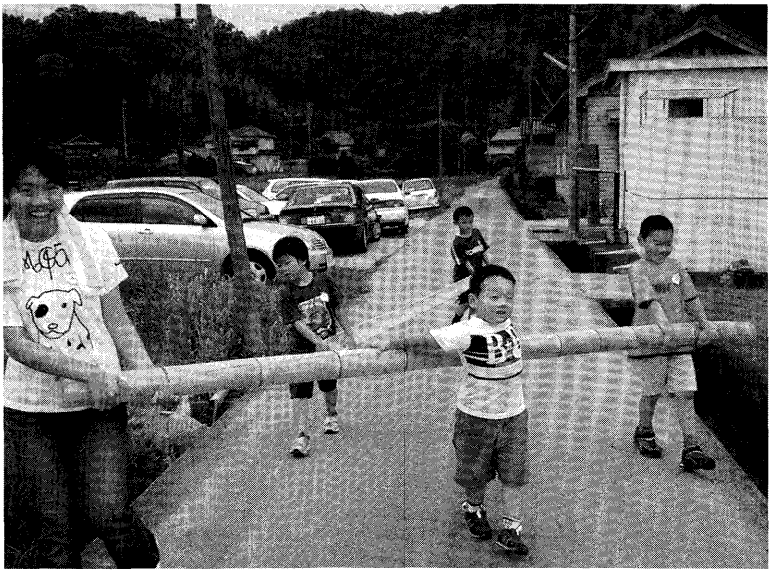
親も楽しむ

戎　喜久恵

流しそうめん

「にじサタデー」で子どもたちが一番好きなのは散歩です。小道を歩いたり、休耕田に入ったり、裏山に登ったり、小川をのぞいたり、野原に座り込んだりと時間が経つのを忘れてしまいます。そして、散歩に負けず期待して楽しみにしているのが「流しそうめん」です。「流しそうめん」は、四月のタケノコ掘りがきっかけではじまりました。タケノコ掘りに満足した子どもたちは親竹も切って持って帰りたいと言い出したのです。少し大きな子どもたちが竹挽きのこぎりを持って挑戦しました。地主の佐藤さんと平尾のおじさんはアドバイスをしながら根気よくつきあってくださいました。木片を切ったことは

ある子どもたちですが、木を切るように上手くはいきません。最後は佐藤さんに助けられて目的を果たしました。倒してみると、生えているときには想像もしなかった大きさです。「かぐや姫がいるかも……」とお話の世界に遊ぶ子、「そうめん流しが出来る」「したい。やろう、やろう」と提案する子、「いやあ、楽しそう」「懐かしい」と喜ぶお母さんたち、こんな状況で流しそうめんははじまったのです。長い竹を運び出す。枝を払う、竹を真二つに割る、節を取る、サンドペーパーで切り口を磨くなどの一連の作業は初体験ばかり、「上手くそうめんが流れる樋」を目指して作業を進めます。竹の性質を活かした枝打ち、竹割り、節取りや、削る、磨くなど目的にあったさまざまな用具や道具を使いながら「人間って、すごいね。賢いんだね」と感心することしきりです。



▲“ちょっと　てれるよナー”　準備も片づけも自分らで

さて、このようにしてはじまった「流しそうめん」も今年で三年目を迎えました。

経験を積んだスタッフや先輩ママは経験を生かして手際よく樋に角度をつけ、水を流して試してみます。初年度の試行錯誤の成果が活きています。そして参加者もこんな流しそうめんをと一味加えて今年の流しそうめんを生み出していきます。スタッフが準備した薬味のほかに「私のうちは、こんなものも入れると喜ぶのです」「うちは……、私が好きなので……」と持ち込まれて加わったりもします。「あら、おいしい。早速やってみよう」と情報交換をしています。大学生は薄焼き卵のできばえに歓声を上げ、子どもたちもショウガをおろしたり、包丁をもってネギ・卵・わかめ・かまぼこを切ったり思い思いに参加してきます。昨年よりうまくなって「拍子木タマゴ」から「錦糸タマゴ」へと上達している子もいます。「すごい。おいしそうに出来たね」と認めてもらった子は、隣の「乱切りタマゴ」の子に「でも、それもおいしいから、いいのよ」と、昨年、伊勢先生に声をかけてもらったのと同じことばで励ましています。自分がしたことを大切に尊重され心地よい経験をした子は、自分以外の人を心地よくしていく力を内に育てていっているようでうれしくなります。

そうめんを流しはじめると箸を持ってチャレンジです。タイミングを計って挟もうとする子、じっと箸を構えてそうめんがかかるのを待つ子、箸にかかった一本のそうめんを大事そうに口に入れる子、母親に食べさせて喜ぶ子、たらふく食べる子、とれた量を競っている子など実にさまざまの楽しみ方をしています。流すことが面白く工夫をする子も現れます。みんな生き生きとして、一人一人違ったかかわり方をしています。一人一人が流しそうめんで実現したいことを表現しているのです。この日、食べ

▲それぞれの参加の仕方で……

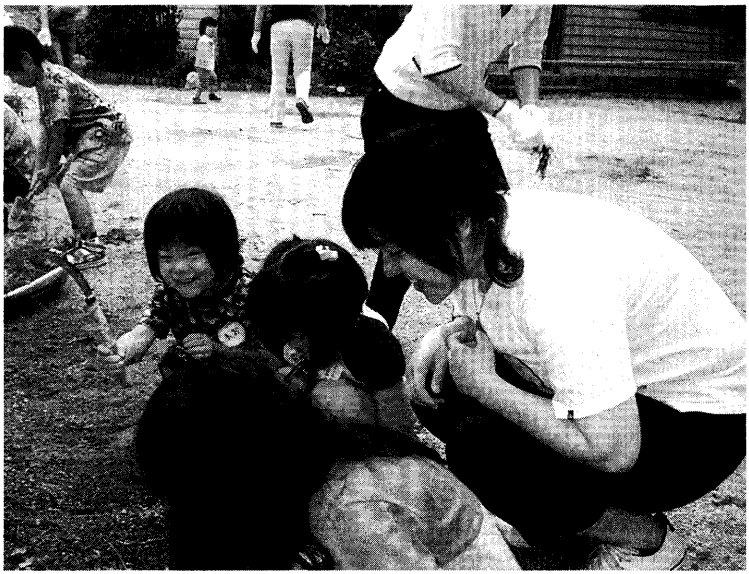
るそうめんは大人標準量の約一、五倍を軽く超えてしまいました。

『レインボー通信』に寄せられた「流しそうめん」に参加しての感想を紹介します。

「ちょっと」と「ありがたい」と「せっかく」

「ちょっと草でも抜かせてもらおう」とおばあちゃんが始められた庭の草抜き。

「あら、あら、ありがとうございます。雨が降ったよらく生えますねえ」おばあちゃんとお話をしながら先生がちょっとかかわると……不思議、不思議、子どもたちもお母さん達もお父さんもお姉さんも、みんないつしか草むしり。「すごおい」「あっ。みみず」「一緒に引っ張ろう」なんだか楽しく、いい気持ち。「せっかく、みんながきれいにしてくれたから、お花でも植えとこうね」お宅に帰りケイトウの



▲ちょっと草でもとりましょか　草とりもたのしい

花の苗を持ってきてくださり、プールの周りや花壇に植えました。伊勢先生や赤澤先生やお母さんたちのところから卵焼きやそうめんの茹だったおいしい匂いがしてきたのはそのころでした。「ちょっと」した心配りや共感、「ありがたい」と思える感謝の気持ち、「せっかく」だから大切にする、無駄にしない、心を砕く。これって子育ての極意？

「わくわくしながら親も楽しむ」

夏本番間近、六月のにじサタデーは、とても楽しみにしていた〝流しそうめん〟。私の子どもの頃は夏になるとあちこちで行われていた〝流しそうめん〟も最近ではあまり見かけられなくなり寂しく思っていたので、子どもと共に大はしゃぎしながら楽しませていただきました。

子どもは、もちろん初めての体験だったので大喜び。流れてくるそうめんをGETするのに、すごく

真剣なまなざしで、お箸に止まったそうめんをすくい上げた時の顔は、何ともいえない満足顔。気がつくとおそうめんをGETするのに一生懸命で、器の中には山盛りのおそうめんが……（ほとんど、それを食べていたのは、母の私でしたが）。

子ども曰く、「〝おそうめんつり〟って楽しいね。ママ！」。なんだか夜店の金魚すくいか風船つりの感覚で楽しんでいる我が娘に、夏のひととき、気持ちもお腹も幸せいっぱいになりました。

先月号のレインボー通信に、「『にじサタ』に来るとなんだか心が落ち着くのはどうして……？」というコメントがありましたが、実は私もまさしく同じことを感じていました。本当にどうして『にじサタ』に来ると、心が落ち着くのでしょうか。

私なりに色々考えてみたのですが、私達親子の場合は子どもが楽しいのは勿論の事ですが、やはり母の私も毎回一緒になって、ワクワクしながら、楽しませて頂いている事が大きいのでは……！と思うのです。親が楽しい時って、それだけ子どもに対してもゆとりを持って接する事が出来るのでは？と考えるので、子どもの方も安心していられるのかな？なんて勝手に思ったりしているのです。よく三歳位までの子どもは、「母親を通して物事も見ている」と聴くのですが、母親が楽しい事って、子どもにとっても楽しいものなんだぁ！って、（全てがそうではないのかもしれませんが）『にじサタ』に参加する度に、実感しています。『にじサタ』は、今、私たち親子の住んでいる周りでは決して触れる事の出来ない素晴らしい環境のもと、なかなか体験出来ないような色々な事にチャレンジさせて頂けるほか、子どもにとっては異年齢のお友だちとの触れ合いを通じて、刺激を受け、子どもたち同士で学び合っているところにも、にじサタの素晴らしさを感じます。

時には大人に教えてもらうよりも、本を読むよりも、自分自身が体験して心に受けた感動は、いつまでも深く残り、自らを成長させてくれるのではないかと思うのですが……。（以下略）　（Mママ）

「かけがえのない時間」

うわさは以前から聞いていたけれど一人でいく勇気がなく友人に連れて行ってもらったのは今年の夏でした。（略）中へはいると前回も好評だったという流しそうめんの準備がもう始まっていた。親から指示されることもなく、娘は錦糸卵を切り、息子はサッカーを始めた。準備ができ先生がそうめんを流し始めると初体験。青竹を流れるそうめんつかみに夢中になっている。そうめんを流す青竹も手作りで、遊びも環境もごく自然。（略）週休二日制となり時間をもてあましているお子様対象に作られた人工的空間やイベント（含む塾や稽古）とは全く相反

▲流しそうめんの準備をする横ではサッカーも

した伝承遊びは私たち親子をすぐとりこにした。家族で自然を求めて行動しようと考えてはいるけれど、行動半径も狭く限られたものになってしまう。しかし、多くの先輩の豊かな知識と経験に裏打ちされ今の子どもたちに伝えたいという熱意で築かれた環境は、我々の心の窓を素直に開かせる。そして、大勢の人と幸せなひとときを過ごせたことで豊かな気持ちになれ、さらに感謝の気持ちを育ててくれる。

（ミッキーmamas）

子どもと過ごすときに大切にしていること

『にじサタ』では、「こうしなければならない」はありません。子どもの「私は、こうしたい」を大事にしています。こうしたいと思ってもうまくいかないことはいっぱいあります。うまくいかないときに子どもは考えます。それでもうまくいかないときは、スタッフや親が手助けをします。そうすることで、子どもは自分に出来ることと出来ないことがあることを学びます。自分に出来ないことが出来る他者に感謝をしたり、憧れたり、尊敬したりすることが出来ると考えています。そこで、「あせらないで、よく見て交わる」ように話し合っています。子どもが手助けを求めないのに先走って手助けをすることは子どもにとっていい経験にならないのです。また、「ああさせたい。こうしなければ」では今を充実して過ごせないばかりか子どもも親も楽しめないからです。

（神戸女子大学）